

2020.02.16

「悪い者から救ってください。」  
マタイによる福音書 6章 13節

【悪からお救いください】

主の祈りの中に、文語訳では「我らをこころみにあわせず、悪より救いいたしたまえ。」共通口語訳では「わたしたちを誘惑に陥らせず、悪からお救いください。」という言葉があります。

私たちが絶望に引き込む力、神から引き離す力の中に陥ることがありませんように。

絶望することがありませんようにという祈りがまず教えられ、そのあとで、その絶望に引き込む「悪の力」から救ってください。「悪いものからお救いください」とつづきます。

「悪とは何か」

わたしたちを悪からお救いください、とありますが悪とは何でしょうか。

災害とか、病気とか、そういうことも含めて、様々な良くないことも悪に属するものだと思いますが、ここでは、むしろ人間が犯す悪、神様に対して罪を犯すことを意味します。

「悪いもの」

この「悪」を「悪い者」というように解釈することもできます。

悪い者というのは、つまり誘惑する者、悪に誘う者、誘惑者、責め立てるもの、究極的には神の敵である

「悪魔」です。また、悪魔が心に働いている人たちのこともふくまれているでしょう。

私たちをつまずかせる存在、神から引き離そうとする存在も「悪いもの」と言えると思います。

責め立て、神から離れるように誘惑する者に負けないように、わたしたちを強めてください、という祈りと考えることができます。

しかし、それらの人たちの背後にある「悪霊」の仕業に対して、私たちは極度に恐れる必要はありません、キリストが十字架で処分してくださったからです。

「私たちを悪からお救いください」

しかし、「悪から、悪いものからお救いください」と

いう祈りは、私は絶対正しく、あの人が絶対悪いので、あの人を滅ぼしてくださいという祈りとは違うように思います。

パウロは「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすぎを与えてはなりません。」(エフェソ 4章 26~27節)と語りました。

これは、私たちの怒りが、罪を犯すことにつながる危険があることを教えています。

「正義の怒り」「義憤」があるとしても、それによって罪を犯し、悪を作り出すことがありませんようにという祈りです。実は、怒り続けることによって、いつしか行き過ぎることがしばしばあります。

長く怒り続けることによって、罪を犯す危険が高まります。

歴史を振り返ってみますと、正義のための戦いという大義名分を掲げて戦いを始めることは、決してめずらしいことではありません。そのような主張をすることによって、多くの人々を戦いへと巻き込んでいきました。

国と国との戦いだけではありません。個人と個人のことでも同じです。自分が正しく相手が間違っている時、その過ちを相手が認めなかったり、悔い改めることをせず、なお過ちを繰り返していく時、その悪を断ち切らねばならない、悪を取り除かなければならないと言って、自ら罪を犯すことがあり得るのです。

昨日、私はカウンセリング講座の中で、マハトマ・ガンディの映像を見たのですが、ヒンズー教徒とイスラム教とによって構成されていたインドが独立と同時に宗教対立が激化し国は二つに分かれ、およそ 60 万人の命が失われました。双方が宗教的な正義を掲げ、殺し合ったのです。

ガンディ自身もまた、過激なヒンズー教徒によって暗殺されました。

キリスト教の歴史を見ても、十字軍をはじめ、目を背けたくくなるような悲惨な殺戮が「宗教的正義」のもとに行われ、憎しみ連鎖が生まれています。

私たちはこの世界、この社会の中で、キリスト教的正義という名のもとに「悪」を行ってはならないのだと思います。キリスト者であっても、正義のため

に、神のためにと行って悪を行っていく危険があるのです。上から目線、自分だけが絶対正しいという主張の背後にその悪の種は潜んでいます。

「悪から救ってください」という祈りは、自分自身の内側にある「高慢、怒り、憤りから引き起こされる悪から救い出してください」という自分自身への深刻、真剣な祈りにも通じなければ意味がありません。

「悪から守られる」ということを実体験するためには、相手の祝福を祈ることが必要です。

使徒パウロは、「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。・・・悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。」(ローマ 12 章 14 節、21 節)と教えています。

祝福を祈ることは、相手の悪を容認したり、助長することではありません。相手のために神に祝福を祈ることは、その相手に「自分の悪に気づかせてくださいと祈る」ことです。

彼らが「悔い改めますようにと祈る」ことです。

「自分がされて嫌なことは相手にしなように心がけることができるように」心の変化を神様に祈るのです。

私たちがそのように祝福を祈ることが出来ないのは、私のほうが絶対正しいという思いがあるからかもしれません。人にはそれぞれの立場の言い分があるものです。

使徒パウロは次のように教えています。

「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。」(ローマ 5 章 8~10 節)

私たちが罪人であった時に、キリストが十字架にかけられ、私たちに対する愛を示してくださいました。私たちが神の敵であった時に、神の方から和解の手を差し伸べてくださったのです。

そのように神の憐れみを受けている私たちが、周囲の人々を指して「あれは滅ぶべき悪人だ」などと言えるでしょうか。それこそ、悪と憎悪の連鎖を生み出す上から目線の言葉のように感じます。相手のために、神の祝福を祈れる心が必要です。

それができてこそ、悪から救われたと言えるでしょう。「悪からお救いください」という祈りの中身は私たちの心から出てこなければなりません。

「神が救おうとされている人々を、私たちが呪うようなことがないようにお守りください。私たちの心が悪に染まることはありませんように」と、いう願いと重ねなければなりません。

パウロはテモテに語りました。「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。(テモテへの手紙第一 1 章 16 節)

私たちは赦されて生かされている罪人にすぎません。私を私自身の中に起こりかねない「悪」から救い出してください。主の祈りはそんな願いで終わっています。

#### 「平和を求める祈り」

神よ、わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところにゆるしを、分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、闇に光を、悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。

わたしたちは、与えるから受け、赦すからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠のいのちをいただくのですから。アーメン